

# アトリエ 琉游舎 だより 81号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2020年6月17日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



## インテルメッツォ 間奏曲・幕間劇

- 梅雨に入りしました。梅雨というと雨が降り続くイメージがあります。確かに梅雨入り直後はしばらく雨模様ですが6月中旬過ぎには晴れ間が続く日があります。梅雨の中休みです。
- インテルメッツォはドイツ語で間奏曲や幕間劇の意味です。オペラや劇の本編の幕間に奏でられたり演じられる、小休止と気分転換そして次幕への準備のひとつときです。
- 梅雨の中休みもインテルメッツォのようなひととき。梅雨の蒸し暑くじめじめとした毎日ちょっとした間だけ太陽の光が差す貴重な日です。一気に洗濯や掃除をして気分を一新。梅雨末期の大雨に備えて身心をリフレッシュし、来るべき暑い夏への備えも万端。
- 今もう一つのインテルメッツォが、奏でられ演じられています。新型コロナ禍の第一幕が先般の緊急事態宣言解除で、一旦幕を下ろしたとすれば、今は第二幕が開く前のインテルメッツォです。「一幕のみで公演打ち切り！」と、そうは問屋が卸さないでしょう。
- 第二幕は否応なく幕が開きます。インテルメッツォの舞台裏では次の準備に余念がないはずですが。十分な医療と教育体制、雇用の維持と事業の継続をバックアップするための舞台装置と役者の完成度は磨かれているのでしょうか。残念ながら第一幕は三文芝居にも劣る、見るに堪えないものでした。脚本の見直しと演出・演技の練度を高める時間はまだあります。もし二幕も一幕の焼き直しのドタバタ芝居だったなら、私たちは声を大にして叫びましょう。「金返せ！脚本、スタッフ、役者、総入れ替え！」手遅れとならない前に。

木 金 土 日

### 6・7月スケジュール

月	火	水	18	19	20	21
22	23 読書会 13時半	24	25 映画会13:30 居酒屋の会16:30	26	27	28
29	30	7月1日	2 映画会 13:30	3	4	5
6	7	8	9 映画会 13:30	10	11 詩話会 13:30	12 写経会 13:30
13	14 読書会 13時半	15	16 映画会 13:30	17	18	19
20	21	22	23 映画会 13:30	24	25 居酒屋の会 16時半	26

**読書会**  
6月23日(火)  
7月14日(火)  
13時半から

**詩話会**  
7月11日(火)  
13時半から

**写経会**  
7月12日(日)  
13時半から

**居酒屋の会**  
毎月25日  
16時半から

**映画会**  
毎週木曜日  
13時半から

それを生業にしている人にとっては喫緊時なのかも知れませんが、そうでない人にとっては、今なくてはならないものと、なくても不便を感じないもの、つまり不要不急のものがはっきりと分かったこの二ヶ月だったのではないのでしょうか。私自身、昨日今日明日も全く変わらない日々を過ごし何らこの緊急事態宣言に不便やストレスを感じることはありませんでした。自分の毎日から何かを削ったり足したりする必要がなかったということです。今現在コロナ禍と戦い悪戦苦闘している人たちにとっては高みの見物のようにも聞こえる失礼な発言かも知れませんが、誤解を恐れずに言えば、食べて寝て次の日に目を覚ますことができれば、それ以外のことは私にとって不要不急のものだ。とすることに気づいてしまったのです。それは裏返せば、私自身がこの社会の中であって「食べて寝て起きる」だけの不要不急の存在であるということでもあります。

ここで私は「私たちはせんじ詰めればすべて不要不急の存在だ」などと言う厭世的な言辭を吐くつもりは全くありません。私の不要不急はあなたの必要至急かもしれませんし、またその逆もあり得るでしょう。政治家や専門家が不要不急の外出は自粛しましょうと催眠術のように繰り返すので、試みに、自分が必要至急と思ひこんで重ね着をしていた不要不急の衣を一枚一枚脱ぎ捨ててみると、残った衣が「食べて寝て起きる」ということでした。これは「生きる」ということなのでしょう。言うまでも無く「生きる」ことはその人個人にとっては最大の必要至急事です。決して不要不急ではありません。ここに社会と個人の関係に大きな矛盾が生じてきます。「生きる」ことは個人の唯一無二の必要事であるのに対し、個人の「生きる」にとどまっている限り、社会にとってはその個人は不要不急の存在になってしまいます。個人が「生きる」と社会で「生きる」、この矛盾と両立を考えると私は二人の対照的な宗教家を思い浮かべずにはいられません。

宗教家にとって「生きる」ことは「信」を生きることです。親鸞は阿弥陀仏の他力の慈悲に「信」を置くことが「生きる」ことでした。日蓮は法華経の行者として社会に正法の「信」を確立することが「生きる」ことでした。親鸞の言葉に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」<sup>注1</sup>とあります。阿弥陀の慈悲を独り占めしようとするなんとエゴイスティックな言葉でしょう！「弥陀の五劫思惟の願」は「本願」と言われるもので「名号（南無阿弥陀仏）を唱えた者は必ずその救いによって極楽浄土に生まれる」という阿弥陀の誓いです。「無量寿経」に説かれたこの誓願はもちろん親鸞一人のためではなく、総ての念仏者に等しく向けられたものです。しかし彼はその誓いは親鸞一人のためであると豪語しているのです。日本最大の信者を抱える真宗系教団の宗祖なる人の、これが「信」を生きる姿です。実はここに「信」の本質と逆説があります。宗教は個人と「信」との長く孤独な対話です。親鸞にとってそれは、独り荒野における阿弥陀仏との長い長い向き合いだったのです。その孤独の「生きる」を極めたときに初めて阿弥陀の慈悲に包まれ、安らぎの処へと赴くことが出来ました。彼の安らぎの処は彼一人だけのものです。だから彼は「ひとへに親鸞一人がためなりけり」という言葉を発することが出来たのです。しかし彼は同時に「あなたにもあなただけの安らぎの処があるはずです。だから独り阿弥陀仏と向き合い対話しなさい」と語っているのです。これが親鸞の「生きる」ということです。各々が阿弥陀仏と対話し（念仏を唱え）各々が安らぎの処へと赴くことが彼の宗教です。親鸞も各々の内の一人として他力の慈悲の指し示すままに歩むとき、各々の孤独の「生きる」が共聴し合い、ともに共通の「生きる」になるのです。孤独の極限の末の共通の喜び、弥陀と共に生きる安らぎ。なんと素晴らしい宗教の本質とパラドックスがここにあります。

一方日蓮は自力の宗教家です。彼は法華経との長い長い対話の末に法華経と一体化する道を選びました。それが唯一彼の信じた安らぎの処へ進む道だからです。彼はこの正法の教えを独り占めにせず皆と共有しその喜びを分かち合いました。弟子や信者たちにも法華経とともに歩むことを求め、彼はその先頭に立って正法（法華経）の「信」を鎌倉の世に掲げるために社会へと進軍していきました。さながら日蓮は正法軍の大將です。これが彼の「生きる」ことでした。「法王（釈迦）の宣旨（命令）背きがたければ経文に任せて権実二教（諸経と法華経）のいくさを起し（中略）一部八巻（法華経）の肝心・妙法五字（妙法蓮華経）の旗をさし上げて（中略）権門（諸経）をかつぱと破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ、、、」<sup>注2</sup>日蓮が流刑地の佐渡から鎌倉の門弟に送ったまるで軍記物を読んでいるような書簡です。戦闘的で独善的という批判はここでは留保させて下さい。日蓮は法戦ののちに「現世安穩」安らぎの世が実現すると考え、法華経を身に纏い法の化身となって人々の先頭に立って生きてきました。個人の「生きる」を共有の「生きる」に自覚的に変えていく「信」。これが日蓮の「自力の信」です。一方、各個人の極めた「生きる」を自然（じねん）に共有する「信」。これが親鸞の「他力の信」です。この対照的な「生きる＝信」の優劣・好悪を論じることが意味が無いでしょう。いずれも彼らはたった独りで教えと対座し、極限まで語り合った結果の「行い」であり「生きる」の究極にある宗教者の「信行一致」の顕現がここにあるからです。

二人の「生きる」を語った後で私の「食べて寝て起きる」という「生きる」はいかほどの意味があるのでしょうか。ただ不要不休の衣を脱ぎ捨てた果てに分かったと言うその一点だけは揺るぎのないものです。ここからでしか私の「生きる」も「信」も「行」も何も無いはずですが、今日も「食べて寝て起きる」日々を自然（じねん）にか、それとも自覚的にか、どちらもあるがままに生きることに変わりはないと「信」じ、常にここに戻り原点として歩んでいきたいと考えます。